

## 298. 平成12年度滋賀県下における 発掘調査の紹介 (その2)

### 12. 鵜川シシ垣遺跡 (江戸時代)

高島町 鵜川シシ垣遺跡

高島町域は南の大半が山地で、北に3分の1程度の平野が開けている。この山地は比良山地の北縁にあたり、**嶽山** (566メートル) や同山地の最高峰である**武奈ヶ岳** (1214.4メートル) が高くそびえている。山中には多くの動・植物が生息しており貴重な自然環境が保全されている。動物のうち大型哺乳類としては、キツネ・ニホンザル・イノシシ・シカ・クマやノウサギなどが確認されている。

近年、この動物達の被害のうちシカによる植林した苗木の害が多いようである。

江戸時代にあっても、これらの動物たちが山里に降りて田畑を荒したようである。先述にある比良山地北縁の山里では、**鵜川** から **伊黒** にかけてイノシシやシカの害を防ぐためにシシ垣と呼ばれている石垣や土塁の防護柵が構築されている。

伝えでは、寛政年間 (1789~1801) にイノシシ・シカが増え作物を荒らし、享和年間 (1801~1804) に石垣を築いたと云う。ところで、文化8~10年 (1811~1813) にかけて大雪があり、イノシシやシカが激減したようであるが、また文政年間 (1818~1830) にかけて再び増えたようである。

今回のシシ垣調査地区は鵜川地区の西地域にあたる。調査範囲には約32メートルのシシ垣が写真のように残



鵜川シシ垣

存している。高さについては約1メートル前後である。

シシ垣を観察すると、石垣は野づら積みで南面する側に面を整えている。(山側に面を造る) 前面には数条の溝がはしりシシ垣と併行に存在していて附帯施設と考えられる。シシ垣の下位は比較的大きい石を利用するが、上位については小ぶりの石を使っていて素人でも造れる構造と推察する。

(高島町歴史民俗資料館 白井忠雄)

### 13. 古墳時代の大河川跡と岸辺祭祀

長浜市 大戌亥・鴨田遺跡

市立長浜病院建設に伴う、大戌亥・鴨田遺跡の調査も今回で第4次となった。調査は、療養型病棟建設予定地内の1,900m<sup>2</sup>を平成11、12年度において実施した。



河川跡

当初の予想どおり、第1次調査で枝分かれした河川跡を検出し、大量の古式土師器、木製品が出土した。河川跡は、ゆっくりと蛇行して東から西の琵琶湖方向に流れ、河幅は17mから21mで、深度は3~6mであった。遺物が、多量にみられる時期は3世紀頃であり、その後は5、6世紀の須恵器がみられ、僅少なが平安期の須恵器も出土した。これらの遺物より古墳時代初頭から平安頃まで河川として機能していたとみられ、埋没後は12世紀代の溝が構築され、埋土中より曲物、土師器の出土がみられた。

そして、3世紀代の河川跡北岸部より集石遺構が検出され、中心部分には並べられた完形品の甕と壺が出



土した。甕の肩部へは逆ト字の記号文がみられトの字を表現したのではなからうか。また、このような集石遺構は古墳時代において全国的には2例の報告があり、東大阪市例と出雲市例がある。さらに共通することは、水に関係する祭祀であり、板石を組み上げることである。検出した集石に使用された板石の材質は、硬質砂岩、花崗岩、自然石であった。おそらく、河川祭祀と琵琶湖に対する祭祀であると考えられよう。

さらにまた、特筆すべき遺物として軽石製の浮きがあり、古墳時代の遺物としては貴重であると言える。過去の出土例でも、九州・中国・四国・近畿地方南部の海岸部に近い遺跡よりの出土はみられるが、内陸部の出土であり琵琶湖の漁業に使われていたと思われる、物質流通を考えさせる資料である。

(長浜市教育委員会 西原雄大)

#### 14. 奈良時代の土壙から土馬が出土

野洲町 小篠原遺跡

野洲町の中心街に位置する小篠原遺跡は、縄文時代から中世にかけての集落遺跡として周知されている。今回の調査地は旧中山道沿いに位置しており、古代東山道の推定路としても考えられている。調査を進めた結果、その関連性が高い幅約1mの溝1条と溝に並列して建っている掘立柱建物1棟が検出された。溝は中山道に直行する位置にあり、埋土から7世紀後半から8世紀初頭の須恵器・土師器が出土している。

また、前項の遺構が出現する直後まで存続していたと考える竪穴式住居1基、室町時代の遺物が出土した溝、掘立柱建物6棟以上をそれぞれ検出した。遺物では、室町時代の溝に混入した弥生時代の石鎌や、奈良時代初頭に併行する土師器・須恵器、室町時代の土師皿や信楽焼等が出土している。その中で奈良時代の土壙より「土馬」が出土したことは大きな成果といえる。

土馬は、調査区域の旧中山道沿いに近い幅0.8mの土壙から出土しており、形状は脚部周辺のみで腹部に2箇所の穿孔が確認でき中空を呈している。時期は同じ出土遺物から7世紀後半から8世紀初頭に比定できる。



土馬出土の土壙(中央)

土馬は当時、流行した疫病は祟り神が馬にまたがって広めたと恐れられており、その足である馬の動きを封じ込める呪いの道具として使われたといわれている。そのため、だいたいの発掘事例では意図的に破壊された状態で出土しており、今回の調査でも同じ結果が確認できた。

野洲町内での土馬の出土は、これで10例目にのほり徐々にではあるが古代における祭祀の様相が浮かびあがっている。今回の調査は、その復元に欠かすことのできない貴重な資料を得られたと評価できる。

(野洲町教育委員会 田中城久)

#### 15. 弥生から鎌倉時代の遺構を検出

野洲町 辻町遺跡

野洲町辻町に位置する辻町遺跡はこれまでの調査件数が少なく性格不明な部分が多かったが、今回(仮称)ほほえみ情報交流センター建設に伴い広域発掘調査が行われた。

今回の調査地点は大岩山銅鐸出土地から約1.5km離れた位置にある約1万平米である。

調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓8基、平安～鎌倉時代の集落に伴う掘立柱建物7棟以上、井戸4基・溝・ピット多数や河道遺構を検出した。



調査地全景

方形周溝墓は①溝を共有しないものと②溝を共有するものに大別できる。また溝が全周するものはなく、コーナー部が1ヶ所ないし2ヶ所途切れている。埋葬施設等は検出されなかった。全長は9.5～12m程度で、溝の幅は1～3m程度、残存する深さは0.1～0.5mと浅い。いずれも溝内から遺物が出土しており、長頸壺、広口短頸壺、受口状口縁を持つ甕、小形鉢等が見られる。概ね弥生後期前葉～中葉の範疇におさまるものと考えられる。

集落に伴う遺構からは9～10世紀にかけての遺物が出土しており、回転土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器杯等が見られる。その他には14世紀代の土師器碗、皿がある。

以上の結果、弥生時代において墓域であった本調査



地は平安時代には集落の中心域になったものと考えられる。その後は中山道の発達に伴い集落の中心は中山道沿いへ移行し、現在の辻町集落の前身になったものと考えられる。

このように、本調査地は辻町遺跡の中心域にあたり、複数の時代にわたって人々の生活が営まれていたことがわかった。

(野洲町教育委員会 中村幸代)

## 16. 旧野洲川堤防の平面調査

### 中主町 堤遺跡

堤区農村公園建設工事に係わる発掘調査で、堤集落の南側に所在する狩上神社南側の旧堤防敷約4,800㎡を対象地とし、その内の削平部分約920㎡について3遺構面積約2,760㎡を調査した。

これまでの3次に及ぶ発掘調査において、幾つかの点が明らかにされている。まず、①旧北流は自然河道を固定したのではなく当初は人工河川であったこと、②人工河川の築堤時期は少なくとも15世紀前後と見られること、③寛文2年(1662)の琵琶湖西岸地震と見られる大規模な噴砂跡の存在から、2～3世紀の間に天井川化が急激に進んだこと、④平安時代末に創建されたと考えられる規模の大きな寺跡が堤防の南側に隣接していたことなどがあげられる。

第4次調査では、当初の人工河川の右岸堤防と河道〔河床〕の一部について調査を実施した。確認される遺構面は100面近くあり、この内の特徴ある3遺構面について調査を実施した。この結果、台形を呈する右岸堤防を約36m確認した。調査により検出した遺構は、あらい洪水砂による堆積が始まる直前の状況をしめす上層遺構〔用水路から河川への時代〕、用水路が急激に堆積し始め右岸堤防にも盛土が繰り返される中層遺構〔用水路の保守時代〕、堤を築き用水路を初めて作った時の状況を示す下層遺構〔用水路の開削時代〕を示すものである。下層遺構において検出された当初の堤防は、内側傾斜の緩い基底幅約7m、上面幅約2m、高さ約1.5mで、顕著な基礎構造はありませんが粘質な土



野洲川旧右岸堤防跡検出状況

を水平に繰り返し盛った構造で、第1次調査により検出されている左岸堤防の高さとほぼ同じのものであったことが明らかとなった。また河床には、堤防の盛土に用いる土砂を採取するためか、河床を平らにするためか明らかではありませんが、区画を残す無数の掘り込み跡や、堰状の盛土が見られた。

今回の調査により、初めて堤防を平面的に調査できた。これにより堤防の方向がこれまで考えていたよりも直線的であったこと、河床の状況や堤防の付帯構造などが明らかとなった。

(中主町教育委員会 辻 広志)

## 17. 野田沼内湖の調査

### 中主町 野田沼遺跡

野洲郡行政事務組合の一般廃棄物最終処分場の拡張工事にかかわり、戦中の干拓や戦後の圃場整備(構造改善事業)等により水田化した須原沼内湖に所在する野田沼遺跡の発掘調査で、11,795㎡の敷地の内約3,164㎡の3遺構面、約9,856㎡を調査した。

本遺跡は、干拓事業の工事のうちに偶然発見された丸木船により、縄文時代晩期の遺跡として把握されてきた。その当時、同じ内湖の遺跡である近江八幡市・元水葦遺跡や安土町・大中之湖遺跡でも縄文時代後期と見られる同様な丸木船の出土があり、縄文時代の遺跡との印象を今日まで強く与えてきた。さらに、これまで調査の機会が全く無く、町内の中でも遺跡の性格が明らかでない遺跡の一つであった。

今回の調査により、近世～近現代の遺構、中世初めの遺構、古墳時代前期の遺構の大きく3時期の遺構面を調査した。この内、中層で検出された鎌倉時代頃の幅約20m、深さ約3mの堀跡は、用水堀としてだけではなく、水運の存在を示す規模のものであり、さらにこの堀肩より出土した鉄鉾、雁又鎌(鎬矢)、鑿頭鎌(矢)、柄杓、曲物などの祭祀具の存在から、当調査地区が琵琶湖に面する特別な場所であったことを示すものとして注意された。特に鉄鉾は、国宝に指定されている奈良市・春日大社所蔵の古神宝類と同時期のものと考えられ貴重である。また下層では、砂堆の波打ち際に帯状に浮く木製品や土器、水深の浅い湖側のセタシジミやタテボシガイ、カラスガイ等の生痕等、その水位と共に重要な成果を得た。

なお、遺跡発見のきっかけとなった琵琶湖文化館に現在保管される丸木船は、その出土場所が中層の堀跡南側延長部に位置すること、製作技法や船底の浅い構造など中世の丸木船である可能性が高くなった。

今後は、古環境分析の成果や堆積層の検討により、琵琶湖や内湖の変化をより具体的に示せるように整理作業を進め報告したい。



調査地上空より琵琶湖を望む

(中主町教育委員会 辻 広志)

18. 名勝<sup>ひょうす</sup>兵主神社庭園の調査

中主町五条<sup>ごじょう</sup> 五条遺跡

兵主神社は、養老2年(718)創建の縁起をもつ古社であり、古代近江においては比叡神に次いで高い神位を受けていた。神社には、昭和28年に国指定の名勝に指定された庭園があり、現在、平成3年度から始まる整備事業を実施している。この事業では、継続的に発掘調査をしている。これまでの調査成果としては、本庭園が平安時代後期には存在したこと、園池としての体裁が3本の流れ(水路)の合流によるものであること、園池には州浜石敷護岸を施すこと、排水溝が本殿を巡る経路を辿ること、流れ(水路)と共に築地跡が境内を区画していたこと、等が確認されている。また、前代の遺物には、神社の前進的施設の有り様を示唆する円面硯が出土していることも興味深いところである。これらを受け、平成8年には、東側と北側の境内林が名勝の追加指定となっている。

さて、今年度は、北側境内林と拝殿前にそれぞれトレンチを設定して調査を実施した。主な成果は次のとおりである。一点目には、本殿裏側の築地跡の経路が、東側境内林や庭園部で見られるような幾何学的な設計の元に成されたものではなく、周辺の自然地形に制約を受けていたこと。二点目には、現拝殿前で玉石敷きの参道跡と導水溝跡に張出部を設けた橋跡が確認できたこと。三点目には、拝殿の東側に、現園池下に埋もれる園池遺構と同様の溝造を呈する園池状遺構の存在を明らかとしたこと。以上、三点である。時期的にはこれまでと同様に平安時代後期を想定している。中でも特に注目されるのは、三点目の成果である。これについては、兵主神社境内が参道軸で対となる構造をより一層明確にしたということに止まらず、兵主神社庭園の多元性・多層性を最も如実に表す資料として評価できよう。つまり、本庭園はもともとふたつの素掘りの流れ状遺構と島で構成されていたものが、平安時代後期前後の段階で、ひとつの園池は当時の流行である

う州浜石敷護岸に改変され、他方は元来の流れを踏襲したものと考えられる。更には、この改修によりふたつの園池は、それ以前と全く異なった使われ方等をするようになり、次第に後者の遺構は埋没していったものと思われる。

何れにせよ、古代、神社境内に繰り広げられた水の景観のひとつの形を見いだしたことは、神社の祭祀の一面を例示しているだけでなく神社庭園史研究のはじまりとして大変重要な資料である。



拝殿前の調査地

(中主町教育委員会 河合順之)